

# 天保14年刊行『和字絵入 往生要集』第16図 「第二畜生道の事」の研究

— 無常の殺鬼の絵画表現について —

西 田 直 樹\*

## 概要

『往生要集』（平安時代後期成立）のなかでは「無常殺鬼」という悪鬼が登場する。本来は姿の見えないはずの「無常殺鬼」が、角を生やした鬼（獄卒）の姿で描かれるのは鎌倉時代に入ってからのものである。本論文では、江戸時代後期の絵師八田華堂金彦が天保期に描いた「黒雲に乗る無常殺鬼」の制作プロセスの解明を行った。詞章解釈だけでは描けない絵画表現から『往生要集』の解釈史の一端を明らかにした。

## キーワード

・ 仮名書き絵入り往生要集 ・ 無常の殺鬼 ・ 往生要集絵 ・ 八田華堂金彦

## 1 はじめに

『和字絵入 往生要集』とは、天保14（1843）年に刊行された「仮名書き絵入り往生要集」の一本である。

『往生要集』<sup>（注1）</sup>の成立は平安時代、寛和元（985）年の事である。その後、浄土信仰や阿弥陀信仰の深まる中で、その根本的な思想である「厭離穢土 欣求浄土」の思想を説くテキストとして後代においても広く読まれた論書である。『往生要集』の著者である源信（942～1017）は、天台宗の学僧である。源信は、浄土信仰に関わる多くの経典を引用しながら漢文によって書かれている。『往生要集』の冒頭（大文第一と大文第二）には、地獄や餓鬼道、畜生道などを含む「六道世界」や極楽において享受される「十楽」など仏教世界を詳細かつ理論的に著わしている。

その後、法然（1133～1212）や親鸞（1173～1262）といった鎌倉新仏教の祖師たちの活動により、浄土信仰や阿弥陀信仰は日本の農民階層にまで広まり、阿弥陀仏への専念的信仰へと発展していった。しかしながら、浄土信仰の根幹である「厭離穢土」①人間が生

---

\*作新学院大学人間文化学部 准教授

きる世界を穢れた世界と認識すること。②六道輪廻の因果とそこでの苦しみを自覚すること。)の思想を理論的にまとめた論書については、ついに『往生要集』を越える上質なものは出現しなかったのである。『往生要集』は、浄土宗や浄土真宗をはじめ、多くの宗派において六道世界を説くテキストとして用いられるようになったのである。

さて、『往生要集』が広い宗派で、また広い階層で受容され始めた中世においては、『往生要集』の内容を絵画化したり、漢文の詞章を漢字仮名書きの和文に書き換えたりする事が盛んに行われた。(『往生要集』の内容を絵画化したり、仮名書き往生要集の制作例は、既に平安時代末期に見ることができるが、盛んになるのは、やはり鎌倉時代以降なのである。)

江戸時代に入ると、『往生要集絵巻』(江戸時代初期成立)や「仮名書き絵入り往生要集」の版本が制作され、寺院の布教活動に用いられた。中でも「仮名書き絵入り往生要集」の版本は、江戸時代全期間を通じて刊行された。現在9種の「仮名書き絵入り往生要集」の版本が確認されている。各本の概略を示せば以下の通りである。

#### 「仮名書き絵入り往生要集」諸版本一覧

##### ① 寛文3(1663)年本

6冊 題箋の表記は『往生要集』

(お茶の水図書館 林雅彦氏 蔵)

##### ② 寛文期刊行『絵入 往生要集』

3冊

(大谷大学図書館 蔵)

##### ③ 寛文期刊行『極楽物語』

3冊

(国会図書館 他 蔵)

##### ④ 寛文8(1668)年本

2冊

「恵心の極楽物語」の内題あり

(国会図書館 蔵)

##### ⑤ 寛文11(1671)年本

6冊 題箋の表記は『糸入 往生要集』

「地獄物語」「極楽物語」の副題がある。

(龍谷大学 東京大学 西田直樹 他 蔵)

⑥ 元禄2(1689)年本

6冊 題箋の表記は『ゑ入 往生要集』

「地獄物語」「極楽物語」の副題がある。

(大谷大学 佛教大学 蔵)

⑦ 寛政2(1790)年本

3冊 題箋の表記は『往生要集』

「地獄物語」「六道物語」「極楽物語」の副題がある

元禄2年本の再刻本

(佛教大学 西田直樹 他 蔵)

⑧ 天保14(1843)年本

3冊 題箋の表記は『和字絵入 往生要集』

「地獄物語」「六道物語」「極楽物語」の副題がある。

寛文11年本の再刻本

(佛教大学 西田直樹 他 蔵)

⑨ 嘉永再刻本

嘉永年間(1848～53)に刊行

3冊 題箋の表記は『平かな絵入 往生要集』

「地獄物語」「六道物語」「極楽物語」の副題がある。

(佛教大学 京都大学 他 蔵)

## 2 天保14年刊行『和字絵入 往生要集』について

『和字絵入 往生要集』は、8番目に版行された「仮名書き絵入り往生要集」の版本である。その刊記に

寛文十一辛亥年霜月元板

天保十四癸卯年三月再刻

とある。つまり⑤寛文11年本『ゑ入 往生要集』を下敷きにして、版を新たに起こして出版された本なのである。当然、詞章や挿絵も改められている。殊に天保14年本は、絵師の八田華堂金彦が描いた挿絵を売り物にしていた。

八田華堂金彦が寛文11年本の挿絵を元に描いている例（大叫喚地獄の挿絵）



寛文11年本の挿絵



天保14年本の挿絵

八田華堂金彦が聖衆来迎寺の『六道絵』を参考にして描いている例（衆合地獄）



『六道絵』（部分）



天保14年本の挿絵

八田華堂金彦は、元版本である寛文11年本の挿絵や郷里近江の聖衆来迎寺所蔵の『六道絵』（『往生要集絵』）<sup>（注2）</sup>を参考にして天保14年本の挿絵を描いた。

それ以外にも八田華堂金彦は、江戸時代の絵師として独自の解釈によって挿絵を描いている箇所もあり、仏教美術史上注目すべき業績を残している人物である。

八田華堂金彦が独自の解釈によって描いた修羅道の例



三角頭巾をつけた亡者姿の修羅たちの描写

### 3 八田華堂金彦の描いた「畜生道」の概要

「畜生道」は『往生要集』の大文第一厭離穢土の第三番目に記される苦界である。地獄、餓鬼道、畜生道をひと括りにして「三悪道」と呼ぶように、六道の中でも劣悪な世界に位置づけられている。

天保14年本の「畜生道」は、中巻（「六道物語」）の5丁表5行目から6丁表の4行目まで記されている。その詞章は以下の通りである。（なお、天保14年本詞章の改行箇所は「」印で示した。踊り字については読みに合わせて仮名文字を充当した。）

#### 第二 畜生道の事

○それ畜生だうは其住处二つあり。根本は海にすみ。すへずへは人天にまじ」はれり。こまかにわくれば。三十四億の類あり。すべあはせていへば。三つを出ず一つには」鳥のたぐひ。二つには獣のたぐひ。三つには虫のたぐひなり。いろいろの畜生害心を」ふくみて。ちいさきものは。大きなものにのまれ。よはきものはつよきものにくら」はれ。たがひに残害のくるしみ。夜昼しばらくもやすきひまなく。常に恐るる」心あり。いはんや又もろもろの水にすむたぐひは。すなどるものにころされ。も」

ろもろの陸をゆくものは。獵師にいのちをとらるる也。又馬牛象などのごときもの」は。あるひは。くろがねのうちかぎをもつて。其なずきにうちかけられ。あるひは鼻を」うがち。とうされて。引ずりまはされ。あるひはくつわと口にはませつねにをも」

荷を負せはれ。むちずはひをもつて。うたる事ひまなし。ただ水をおもひ」草をねがへども。ここにまかせず。又蝸蜒鼠狼のたぐひは。闇のうちに生まれて」闇のうちに死し。蟣虱蚤のたぐひは。人の身に生じて人にころされ。また」もろもろの龍のたぐひは。よる昼三ねつのくるしみを受けて。止事なし。或は」又蟒蛇は其身大きにたけながく。聾其心験。足なくしてわだかまり。ま」ろび。腹にてあるく此故にもろもろの小さきむし。唆さしくらふ事。ひ」まなし。あるひは又窓に立つみちんのごときものもあり。あるひはうの毛を百」千にわりたるほとものものもあり。あるひは。一万由旬のごときものもあり。」

かくのごとくに。しなじなのちくしやう。あるひは。一ときのま。あるひ」は七時。あるひは一劫乃至百千万をくをへて。無量の苦をうくるなり。」これは愚知無慚にして。いたずらに人の信施をうけて。其施をもつを。つ」くのはざるもの此むくひをうくる也

八田華堂金彦が天保14年本に描いたのは、傍線を引いた部分（2個所）である。それは弱肉強食の世界で常に脅えて暮らし、或るものは獵師に命を取られるという、畜生道の苦しみを説いた部分であると言える。

八田華堂金彦が描いた畜生道の挿絵



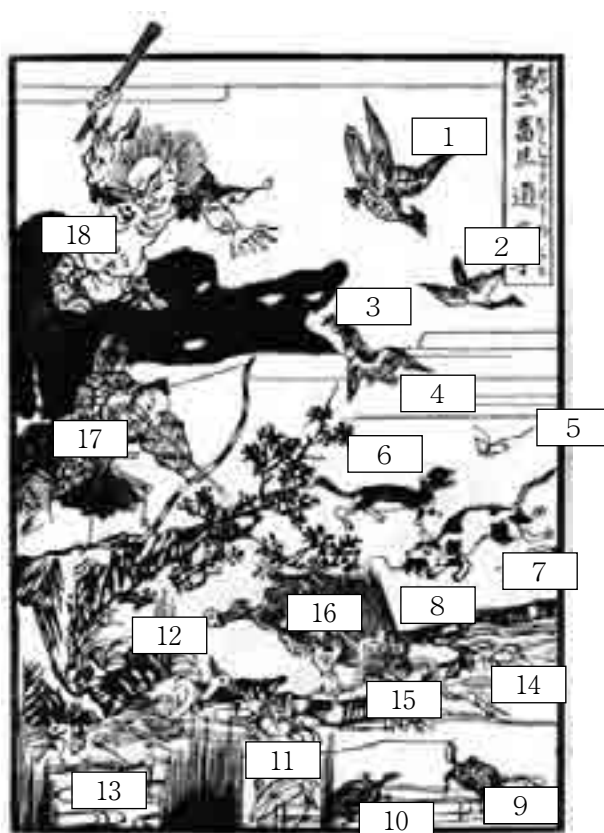
天保14年本第16図は、画面全体は水辺の一風景として描かれているのだが、絵解きに用いる掛絵のように様々な要素がバランス良く配置されている。この第16図は元版本の漢文11年本の挿絵を手本に描かれていない事は、両者を比較すると一目で判る。

寛文11年本の「畜生道」の挿絵は、獣の類を中心に描かれ、全ての獣が画面左を向いた単純な構図で描かれている。象や龍など珍しい獣が描かれている点は注目できる。しかし寛文11年本の挿絵を描いた絵師が、八田華堂金彦の画力には及ばないものである。

#### 寛文11年本畜生道の挿絵



次に第16図に描かれた要素ごとに書き出して、八田華堂金彦が詞章をもとに描いた挿絵の詳細を明らかにする。第16図は18の要素に分類できる。その内容及び詳細は次の通りである。



- ①鳥 1 (猛禽類で②の鳥を追う。)
- ②鳥 2 (雁に似た水鳥。①の鳥に追われる。)
- ③蛙 1 (④の鳥に食われている。)
- ④鳥 4 (やや小型の猛禽類。③の蛙を銜えている。)
- ⑤蝶 (⑥の鼈に狙われている。)
- ⑥鼈 (⑤の蝶を狙っている。)
- ⑦猫 (⑧の鼠を食っている。)
- ⑧鼠 (⑦の猫に食われている。)
- ⑨亀 1
- ⑩亀 2
- ⑪蟹 (⑫の鷺に狙われている。)
- ⑫鳥 5 (鷺。⑪の蟹を狙っている。)
- ⑬鳥 6 (鷺)
- ⑭蛙 2 (⑮の蛇に食われている。)
- ⑮蛇 (⑭の蛙を食いながら、⑯の猪に食われている。)
- ⑯猪 (⑮の蛇を食いながら、⑰の獵師に射られようとしている。)



⑰獵師（⑯の猪を矢で射ようとしているが、⑱の無常の殺鬼に背後から命を狙われている。

獵師は無常の殺鬼が見えていない。）

⑱無常の殺鬼（黒雲に乗り、鉄杖で⑰の獵師の命を狙う。）

画面は右上に「第二 畜生道之事」の色紙が描かれ画面右上部から下部にかけて鳥の類→獣の類→虫の類が描かれている。

画面中央および左側は、弱肉強食と獵師に加えて、詞章には書かれていない「無常の殺鬼」が描かれている点は注目すべき箇所である。

#### 4 聖衆来迎寺蔵『六道絵』について

八田華堂金彦が天保14年本の挿絵を描くにあたって手本としたのは、滋賀県坂本にある聖衆来迎寺が所蔵する『六道絵』（別称『往生要集絵』）である。

聖衆来迎寺の『六道絵』（国宝）は鎌倉時代の成立で、全15幅。第一幅「閻魔王界罪科輕重決断所之図」を除く14幅が『往生要集』の内容を絵画化した作品である。

「畜生道」は、第七幅に「畜生道禽獣虫残害之図」として描かれている。八田華堂金彦が挿絵の手本とした部分は、第七幅の中段部左から右下へかけての部分である。

聖衆来迎寺蔵『六道絵』第七幅（部分）



注目すべきは、獵師の命を狙う無常の殺鬼である。この無常の殺鬼は、矛を構えて獵師を突き殺そうとしている。天保14年本の無常の殺鬼が乗っている黒雲は、聖衆来迎寺蔵の『六道絵』には描かれていないのである。

八田華堂金彦は、天保14年本「畜生道」の挿絵を描くにあたり、聖衆来迎寺蔵『六道絵』第七幅の構図を手本としてはいるものの、無常の殺鬼の姿をそのまま写す事はしなかったのである。これは鎌倉時代に描かれた無常の殺鬼のイメージと、江戸時代の絵師八田華堂金彦の思い描いた無常の殺鬼のイメージが食い違った結果として注目すべき事象なのである。

聖衆来迎寺蔵『六道絵』には、無常の殺鬼が描かれている箇所がもう一つ存在する。それは第十幅「人道生老病死四苦相之図」中段左部分である。

#### 聖衆来迎寺蔵『六道絵』第十幅（部分）



ここでは、老婆を鎚で叩き殺そうとする無常の殺鬼が描かれている。傍らに僧侶が座って臨終の行儀を行っているところから、この老婆は寿命が尽きて死ぬ所であると伺える。僧侶には無常の殺鬼は見えていない。

第十幅に描かれている無常の殺鬼の持物は鎚であり、黒雲にも乗っていない。鉄杖を持ち黒雲に乗っている八田華堂金彦の描く無常の殺鬼とは異なっている。それでは、八田華堂金彦が抱く無常の殺鬼のイメージはどこから生まれたのだろうか。それを明らかにするために、無常の殺鬼という鬼について考察を進めて行きたいと思う。

## 5 無常の殺鬼の姿について

『往生要集』の中で無常の殺鬼について記されているのは、「大文第一 厭離穢土 第五人道の三 無常」の部分である。その詞章は「無常殺鬼不摂豪賢（無常の殺鬼は豪きも賢きも摂はず）」となっており、平安時代後期に生きた源心自身も無常の殺鬼についての知識を持っていたことが伺える。

鎌倉時代に成立した『平家物語』（巻第六「入道死去」）には、熱病にかかって死を迎える平清盛の部下数万人が無常の殺鬼から主君を守ろうとするが、目に見えない相手（死）を前に何もできなかったというエピソードが記されている。その部分の詞章を示せば次の通りである。

命にかはり身にかはらんと、忠を存ぜし数万の軍旅は、堂上堂下に次居たれども、是は目にも見えず、力にもかゝはらぬ無常の殺鬼をば、暫時も戦ひかへさず。又かへりこぬ四手の山、三瀬川、黄泉中有の旅の空に、たゞ一所こそおもむき給ひけめ。日頃つくりをかれし罪業ばかりや獄卒となつて迎へに来たりけん。（岩波古典文学大系『平家物語』上347ページ 引用文中の傍線は西田が付した。）

『平家物語』においては、やはり無常の殺鬼の姿についての記述が無い。ただし「日頃つくりをかれし罪業ばかりや獄卒となつて迎へに来たりけん。」という詞章からは、無常の殺鬼と獄卒とを重ね合わせてイメージしている事が判る。

絵画表現に目を移せば、14世紀初頭（鎌倉時代末期）に描かれた『春日権現記絵』の中に無常の殺鬼の例を見ることができる。ここでは、肺病で血を吐き苦しむ男性の家の屋根に上つて男性の命を狙う無常の殺鬼が描かれている。この無常の殺鬼のは下帯に鎚を挟んでおり、これで男性を叩き殺そうとしているのである。

### 『春日権現記絵』の無常の殺鬼（部分）



しかしながら、この無常の殺鬼もまた黒雲には乗っていない。また、人間から命を奪う得物は鉄杖ではなく鎚である。八田華堂金彦は、何を手本として黒雲に乗り鉄杖を持った無常の殺鬼を描いたのだろうか。

## 6 八田華堂金彦が手本とした無常の殺鬼とは

八田華堂金彦が無常の殺鬼を描く手本とした可能性が最も高いのは『熊野観心十界図』に描かれる無常の殺鬼である。

### 『熊野観心十界図』無常の殺鬼の図



この『熊野観心十界図』に描かれた無常の殺鬼はまさに天保14年本に描かれた無常の殺鬼と同じ姿で、鉄杖を持ち、黒雲に乗っているのである。

『熊野観心十界図』は、室町時代末期から江戸時代にかけて、女性の教化を目的として

描かれた仏教的世界と因果律を曼荼羅形式で描いた一枚絵である。これを熊野比丘尼が持ち歩いて各地をまわったのである。江戸時代には市井の女性への教化が盛んに行われ、井原西鶴（1642～1693）の『世間胸算用』や山東京伝（1761～1816）の『骨董集』『近世奇跡考』には熊野比丘尼の絵解きの記述が見られる。

さて、『熊野観心十界図』に描かれた無常の殺鬼であるが、これは画面左上に描かれている。その下には「老の坂道」と呼ばれる小山が描かれている。



（『熊野観心十界図』に描かれる「老の坂道」）

「老の坂道」とは、人間の一生を山の上下りに喩えた絵画である。画面右下の男児の誕生から頂上の壮年期そして老いの下り坂を下って行く。老いの坂の終盤は、主人公が夫から妻に入れ替わる。妻は、子どもを産み、腰が曲がり、歩けなくなり、やがて墓地で野犬に死体を食われるという悲劇的な最期を迎える。『熊野観心十界図』が、もともと女性に世の無常と阿弥陀への信仰を喚起する目的を持った宗教画であったことが、この主人公が後半で入れ替わる特異な人生絵巻が成立していると考えられるのである。

問題の無常の殺鬼は、後半の主人公である妻から夫を奪い取る（つまり妻が未亡人となる）場面に登場するのである。黒雲に乗って天空高く飛翔する無常の殺鬼の左手につかまれているのは、夫の死体なのである。

このように八田華堂金彦は、『熊野観心十界図』に描かれた無常の殺鬼を『往生要集』（「仮名書き絵入り往生要集」）に用い、天保14年本の挿絵を完成させたのである。平安時代に書かれた『往生要集』の詞章の解釈として、室町時代末期～江戸時代に書かれた絵を用いて描かれた無常の殺鬼は、『往生要集』の著者である源信がイメージした無常の殺鬼とは異なる姿であったろう。ただ私は、八田華堂金彦のような大胆かつ研究熱心な絵師の仕事が、数百年という時代を悠々と超えて日本人の地獄テキストとして読み継がれる『往

西田直樹 天保14年刊行『和字絵入 往生要集』第16図 「第二畜生道の事」の研究 ― 無常の殺鬼の絵画表現について ―

『往生要集』の文化的価値を産み出す一助となった事を、文化史的見地から高く評価したいのである。

## 7 おわりに

以上のように天保14年本の第16図「第二 畜生道の事」について、無常の殺鬼の絵画表現を中心に研究を行った。八田華堂金彦は、この挿絵を描くにあたり、元版本である寛文11年本の挿絵を手本とはしなかった。近江の聖衆来迎寺が所蔵する『六道絵』（『往生要集絵』）の構図を手本としつつ、無常の殺鬼の表現については、『熊野観心十界図』に描かれている（当時の日本人が常識的にイメージしていた無常の殺鬼のイメージ）を移植して描いたのである。

天保14年本の第16図は、八田華堂金彦の挿絵にける情熱と探究心が刻みつけられた、人間の記録史料なのである。

### 注記

（注1）

『往生要集』

『往生要集』には、多くの経典が引用されているが、これらは全て訓読されている。そのため仮名書き詞章のテキストを作ることが可能となった。

（注2）

聖衆来迎寺蔵『六道絵』

鎌倉時代中期成立の「六道絵」（国宝）。『往生要集』を直接の典拠とする最古の作品である。

### 参考文献

- ・『六道絵』（『日本の美術』271）宮次男 1988年 至文堂刊
- ・別冊太陽 日本のころ62『地獄百景』1988年 平凡社刊
- ・『六道絵の研究』中野玄三 1989年 淡交社刊
- ・「『往生要集絵巻』詞章と絵の研究」西田直樹 2000年 和泉書院